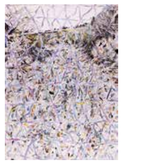
JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します



「金網」 2019／オイルパステル、アクリル、ペトロール、紙／109×79cm

人間と何かしら関わりを持った、あるいは何かの理由でその関係が絶たれてしまった場所に関心を持った作家が、荒れ地から想起するイメージを描いた一枚。建築を学んだ作家は、「設計図の線とドローイングの一筆は等しく、一本のラインを加えることで空間が立ち上がるかのような身体的な感覚を体感する」と語ります。現実の風景と想像の景色の重なりの中に、自然と人工物の境界線やゆらぎが表されているかのようです。

菊池聡太朗 きくち・そうたろう

1993年、岩手県生まれ。東北大学大学院工学研究科 都市・建築学専攻修了。図や絵、写真、建築素材などを用いて工作しながら、身の回りの生活やそれをとりまく風景について研究した作品を発表。青葉区大手町のGallery TURNAROUNDにて、個展「家事（いえごと）」（2017年）、「WISMA・KUWERA」「喫茶 荒地」（ともに2019年）を開催。主なグループ展に「相転移/phase transition」（2017年、KUGURU、山形）、「Collective Storytelling」（瀬戸内国際芸術祭 2019 旧伊吹小学校敷堂）がある。

JOURNAL | art node artnode.smt.jp

アートノード ジャーナル 7号 2020年03月31日 発行
編集長｜甲斐賀治（せんだいメディアテーク）
編集｜田中千秋（せんだいメディアテーク）／長内綾子（communa）
アートディレクション・デザイン｜homesickdesign
印刷｜株式会社文展美術印刷

お問い合わせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1／TEL: 022-713-4483
E-mail: artnode@smt.city.sendai.jp／URL: https://www.smt.jp

アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」に多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台に創出する事業です（2016年度～）。
本紙ジャーナルは、アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが実践の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。
※「アートノード」は「せんだい・アートノード・プロジェクト」の略称です。

smt せんだいメディアテーク sendai mediatheque

© 2020 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます
この掲載はリサイクルできます。

AIR KAIKON 2019

スタジオ開墾 通信 第2回

レポート／長内綾子

昨秋、高知県須崎市で「アーティスト・イン・レジデンス須崎」に参加し、去る2月16日まで須崎市で開催された「現代地方課7 食ノ間（タベルノアイダ）」でその成果を発表した工藤夏海さんと佐々瞬さん。この日のトークでは、「現代地方課」を主催する実行委員会メンバーの川鍋達さんらにインターネットを介して遠隔出演いただき、事業開始の発端から現在の運営手法やプログラムの詳細を説明いただいたほか、二人のアーティストからは、地域のひとびとや自然との関わりを通して行った約2週間に渡るリサーチの様子と、その経験から生まれた作品についてお話いただきました。

人形劇を行う工藤さん

リサーチ中の佐々さん（撮影：高橋洋策）

高知県須崎市は太平洋側に面した人口2万人ほどの港町。地元出身のアーティストや県外から移住したアーティスト、住民の方たちを中心に実行委員会を組織し、AIRやその成果発表などを2014年から毎年開催しています。今年度は、工藤さんと佐々さんを含む計4名のアーティストが参加し、テーマにちなんだリサーチと作品制作を行いました。

「現代地方課 7」チラシ

工藤さんにとっては、はじめてのAIRプログラム参加となった今回。リサーチでは、高知の特産品でもある文旦畑を訪問したり、近隣地域に伝わる神楽を見学したほか、メイン会場である「すさきまちかどギャラリー」のある商店街で、町の人々と即席の人形劇「まちがい劇場」を開催。成果展では、土佐地方の郷土料理「皿鉢（さわち）料理」にヒントを得た大型のドローイング作品「さわち界」や、物語の続きを来場者に書き加えてもらう作品などをインスタレーションで発表しました。

一方の佐々さんは、滞在前から取り組んでいた外来種についてのリサーチを須崎でも行い、採取した植物を天ぷらにして食してみたり、釣りを通して東北とは異なる生態系についての調査を行ったりしました。成果展では、リサーチ終盤で出会った土佐打ち刃物の工房主が、「鍛冶職人でなければ『かつ丼や』になりたかった」と語ったことに着想を得た「もうひとつの世界のためのかつ丼や」という映像インスタレーション作品を制作しました（「現代地方課」の公式サイトには、二人の滞在制作中の様子が若手映画監督による素晴らしい映像にまとめられています）。

トーク終盤では、「アーティストが参加したいAIR」について意見交換を行いました。地域課題と関連するテーマの有無、リサーチから短期間で作品へと昇華することの難しさ、地域の専門家や学術機関との連携、「現代地方課」のような質の高い映像記録やアーカイヴの重要性など、多くの話題についてお二人の意見から考える場となりました。

国内外には、規模や形態などの異なる多様なAIRが存在します。震災を経験した東北の都市・仙台へ訪れるアーティストたちの視点が、これからの社会を生きるヒントとして共有していけるようなAIRを目指し、来年度から少しずつ準備を進めたいと思いますので、引き続き関心をお寄せください。

◎お問い合わせ
Air KAIKON 実行委員会
http://airkaikon.sendai.com/air/

※「AIR KAIKON 2019」トークの部はYouTubeで動画を公開中です。「スタジオ開墾」でチャンネル検索の上、ぜひご覧ください。※「AIR KAIKON 2019」は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、仙台市及び（公財）仙台市市民文化事業団が市内に拠点を置く仙台市または個人と共催で実施する2019年度「仙台市文化プログラム」の事業です。

長内綾子（おさない・あやこ）
1976年北海道函館市生まれ。美大建築学科を卒業後、フリーのグラフィックデザイナーとして広告制作に携わる方で、2004年にアーティストとクレスピス（ウィメンズ）に設立。国内外の展覧会（ギャラリー、ハウス）に関する企画・制作を行う。11月より仙台在住。問題を広く公開する目的で場の設計・おびやキュレーションをモットーに。

文化系企画の5箇条

なにかのイベントを企画し滞りなく開催するには、以下のような点に留意して進めるのが一般的には吉となります。

〔第1条〕 5W2H*の整理が肝心。なかでも「なぜ?」と「動機」はとことん深掘りして!
〔第2条〕 準備と連絡は抜かりなく！うっかりミスにも気をつけて～
〔第3条〕 まさかの事態が生じても、臨機応変に対応できる心のゆとりを!
〔第4条〕 想定外の出来事も、全体を見渡すと結果オーライ！となることを信じて～
〔第5条〕 誰かの役に立っているのだ！という希望を忘れずトライ&エラーで経験値UP!

*5W2H：「When(いつ)」「Where(どこで)」「Who(誰が)」「What(何を)」「Why(なぜ)」「How(どのように)」「Hou much(いくらで)」

傷だらけの企画者たち!?／アートノード的コブある企画の生まれ方

多くの地域で新型コロナウイルスの感染拡大を考慮し、イベントや展覧会、公演、コンサート、上映などの中止や延期の事態となっています。春の芽吹きの季節がやってくるというのに、イベント等を思いっきり楽しむことができないこの状況が、一日も早く収束することを願ってやみません。そんな毎日を少しでも有意義に過ごすにはどうしたらよいのか……豊かな出来事が街のあちこちで再びおこることを期待する編集部スタッフが、「企画づくりのキモ」に思いを巡らせてみました。

※本記事は「2020年3月19日現在の日本国内の状況をもとに作成しています。

▶仙台企画者アンケート

仙台で文化イベントの企画に携わる方々へ、過去にご自身が企画したイベント等の失敗談についてアンケートを敢行。「文化系企画の5箇条」とそれぞれの経験談を読み進めると見えてくるものとは？

クラブイベント

主催したイベント中に見知らぬラッパーにステージを占拠された…何かに納得がいかない様子でラップをしていたが滑舌が悪く聞き取れず、怒るに怒れなかった……。

生ライブでのイレギュラーな出来事に来場者は気づかない。そしてそれは生ライブのひとつの醍醐味でもある、という事を学んだかもしれません。

● 濵田直樹（宮城アナログ文化協会 主宰）

まちづくり

ロゴなど宣伝ツールをつくったり、メンバーなどに声がけしてイベント等のアイディア出しの打ち合わせをしたが、実行しないままに自然消滅した。

打ち合わせ後の具体的なアクションと日程を決めるべきだった。企画の動機が曖昧だったのかもしれません。

● 桃生和成（一般社団法人Granny Rideto 代表理事）

映画トークイベント

トークイベントのゲストが間違えて山形行きの車両に乗り仙台に着かず、イベント中は携帯をスピーカーにしてトーク中やりとりをしました。

何があっても常に冷静になれるかかと。臨機応変に対応する、慌てない、そしてきちんとごめんなさいが言えることが大事。

● 菅原睦子（幕の人 主宰）

ギャラリー

大幅に赤字。

この失敗は繰り返しているので問題ありですが、なるべく休まず展示を行い毎週来てくださる方々に楽しんでもらいたい、仙台の表現できる場所を減らしたくない、という気持ちでなんとか継続中。

● ハチ（ギャラリー勤務）

音楽イベント

イベントの会場を確保する前に日程を決めて出演者たちのスケジュールを押さえたが、想定していた会場がその日は予約で埋まっていたため、仕方なく会場が空いている別の日程でお願いできませんか、と先方に電話したらメチャクチャ怒られて（そりゃそうだ）、「もういいです」と電話を切られた。結局イベントは行ったものの大赤字に。

メチャクチャ怒ったミュージシャンは、当日こっそり東京から来て、ちゃんと受付でお金も払ってyumboのステージに突然乱入し、ステージで凄い勢いでサックスを吹き鳴らした末に走り去って、そのまま戻って来なかった。彼は本当に怒ってそういう行動に出たのかもしれないけど、僕はそれで何故か和解できたように思えて、後日東京で彼のバンドと共演したりした。「学び」と言えるようなものは何も無いけど、とにかく会場は先にちゃんと仮押さえしよう、と心に誓いました。

● 溢谷浩次（yumbo リーダー）

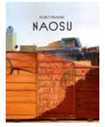
▶企画のキモはコブ !?

この失敗談を読めば読むほど、編集部スタッフはあることを思い出していました。そう、それは本紙ジャーナル0号を飾った、漫画家・いがらしみきおさんによるアートノードのコンセプトを表した4コマ漫画です（右面像）。

企画には多くの困難や想定外がつきもの。しかしそんな出来事さえも、じわじわと後引くおもしろさに変換される、そんな企画にこそ出会ってみたい！さぁ、みなさんも、モヤモヤを世に問う企画を実行してみませんか？

※本誌掲載の『闇の口』（紙面右下）はTRACOの展覧会シリーズ「しらべの細道」を企画制作する美術家の伊達伸明が、vol.4「東海林恵史の東北鉱山突入記」とvol.5「がけっぷちの防空壕」の開催にあたり創作した連載小説（もどき）です。

2019年11月2日から2020年1月12日にかけて開催されたせんだいメディアテークの企画展「青野文昭 ものの、ねむり、越路山、こえ」展の記録書籍。最新作によって構成される本展の写真記録とあわせ、青野の初期作品なども網羅的に掲載する。青野本人によるテキストのほか、美術評論家の椹木野衣、福住廉、映像作家の小森はるからが寄稿。



AONO FUMIAKI NAOSU

［寄稿］青野文昭、小森はるか、椹木野衣、福住廉、清水建人（せんだいメディアテーク）
［編集］細谷修平、せんだいメディアテーク
［写真］小岩勉 ［ブックデザイン］伊藤裕
［制作・発売］T&Mprojects ［発行］せんだいメディアテーク
判型・製本：A4変形、上製本 頁数：192（カラー112頁） 言語：日英
発行日：2020年3月20日 3,500円（税別）

東北リサーチとアートセンター（TRAC）の運営団体「やわらかな土から」による、"さまざまな困難や、なんとかしたい現状から立ち上がるための技術"について考察するシリーズの展覧会「語り野をゆけば」「つくる手 さぐる手 かきわけて」の記録書籍。

立ち上がりの技術01
語り野をゆけば／つくる手 さぐる手 かきわけて

［協働者］小野寺哲、庄司アイ、長沼俊幸、大竹徹祐、きょうこ、工藤生、塗敦子、松浦繁
［執筆］山本唯人、津口在玄はか
［編集］細谷修平（NOOK）、瀬尾夏美（NOOK）、高橋創一
［ブックデザイン］小池俊起
［企画・制作］一般社団法人NOOK
［発行］野尾久舎
［定価］本体1800円＋税

「ワケあり雑がみ部」、はじめてみませんか？

仙台市のごみ分別区分のひとつである「雑がみ」が、家庭ごみに混入されがちという仙台市環境局からの投げかけから、資源ごみである雑がみへの意識を高める機会づくりに取り組むことになりました。そこで、家庭内のビニールやプラスチックなどの廃棄物を活用して、地域に新しい活動を作り出すアーティストの藤浩志さんとともに、市民参加型の部活動として2017年度に始めたのが「ワケあり雑がみ部（以下、雑がみ部）」です。その活動は、せんだいメディアテーク館内にとどまらず、商店街や小学校でのワークショップへと広がりをみせています。そこで今回は、雑がみ部の活動を地域や職場で行ってみたいという方々のために、部活のはじめ方をご案内します。3年間の部活動から見えた、めくるめく「ワケあり雑がみ部」の世界へようこそ！

コレさえあれば始動可能!

〔ヒト〕 部員（募集する）、マネージャー、運営スタッフ
〔モノ〕 雑がみ、工作道具
〔場所〕 雑がみ収集、保存、工作、展示のための場所

特定の場所を占有できない場合は、制作品を持ち帰るなどのルールを決めると良いでしょう。また、はさみ、カッター、テープ類といった基本の工作道具のほかに、洗濯バサミ（紙同士を貼り付けるための押さえ）や、霧吹き（紙を柔らかくし工作しやすくする）、アイロン（包装紙のしわを伸ばす）などの出番もありました。マネージャーの役割については右下の詳細欄を参照してください。

雑がみ部のここがスゴイ!

❶「雑がみ」がごみに見えなくなってくる
❷ 紙を素材に手を動かす作業が気軽にできる
❸ 経験・知識・年齢不問で、世代を超えた仲間ができる

部員は2～3歳の幼児から80歳代の方までと幅広く、こだわりの詰まったさまざまな雑がみ作品を生み出してきました。この活動をみなさんがお住まいの地域や職場などで開催することで、環境問題への意識が高まるだけでなく、幅広い世代が参加するコミュニティ形成の一助となることも期待されます。資源ごみへの理解を深めつつ、多様なひとびとの「居場所」づくりにも繋がるかもしれません。

❶ 集める

メディアテーク1階に「雑がみ収集場」を設け、多種多様な雑がみの中でも家庭でよく保管されている紙箱・紙袋・包装紙を集めました。「捨てられなかった素敵な包装紙が作品になるなら出してみよう」という声も多く、貴重な紙が集まることも。回収した雑がみは、7階の「部室」で保管します。

POINT！
多くのひとびとの目にとまる場所に収集所を設けましょう。部活の宣伝にもなります。雑がみを貯めておけるスペースの確保も重要。

リサイクルへ

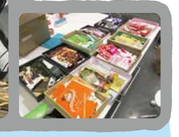
❹ 展示する

毎年の部活の成果を発表する展覧会を行います。作品はどれも個性豊かで、部員の雑がみへの愛情や想像力に圧倒されます。展示の企画や段取り、作品名やつくり手の想いをまとめたキャプションは運営スタッフが担当し、設営や撤収は部員とともに行います。

POINT！
活動を多くの方に知ってもらう機会。発表の場があると制作のモチベーションUP!! 展示の段取りは、中心になる人を決めて進めるのがオススメ。

雑がみ部は4つのサイクルでまわります。

雑がみ部の活動は、おおまかに「集める」「分別する」「つくる」「展示する」という4つのサイクルから成り立っています。環境問題や資源分別に集中するだけでなく、「つくる」「展示する」といったアート活動を通して、捨てるだけだった雑がみに新たな命が吹き込まれます。



❷ 分別する

集まった雑がみは、仕分け好きな某マネージャーや部員の手によって素材や色ごとに次々と分別されます。集まった紙箱・紙袋・包装紙を色や材質、サイズ、かたちごとに並べてみると、まるでホームセンターのパーツコーナーのよう！そんな部室は、部員の創作意欲を掻き立てます。

POINT！
日頃から整理整頓が好きな方にはもってこいの作業です。みんなで仕分けのルールを決めて進めるのも◎

❸ つくる

活動当日は手ぶらでOK！何をつくってもOK！工作道具はあらかじめ用意しておきますが、マイ道具を持参する部員も。子どもの付き添いで来たというお父さんが、だんだんと雑がみの魅力にはまって夢中になることもありました。世代などを越えた交流が、雑がみ部の居心地の良さを形づくっています。

POINT！
つくる場所の確保が重要。オープンな空間だとなお◎ 基本の工作道具があると気軽に参加しやすい。出入自由、1度の参加でも部員です（笑）

部員のみなさんの声

○埼玉から引っ越しをしてきて、仙台をブラブラしていたら雑がみ部のことを知って、楽しそうだったので参加しました。何を作ってもOK、自由参加ということで、気軽に参加できました。

○メディアテークに来た時、回収ボックスを見かけました。紙が好きなので気になって近づいてみると、雑がみ部部員募集とのこと。これに呼ばれたなと思いました。

○老若男女関係なく楽しんで制作しているところ、お互いにほめたり教えあったりしているところが印象的です。「ここにある紙、全部自分の好きにしていいんだ！」というワクワク感も魅力です。

○生活に役立たない物を集中して懸命に作ることが、こんなにもストレス発散になるとは！

雑がみ部を支える、マネージャーとは!?

こんな仕事です
「集める」「分別する」「つくる」「展示する」を円滑に行うためのサポート
部員さんの「つくる」意欲を応援し、「悩む」時間に寄り添う

「ワケあり雑がみ部」は、他のワークショップと違ってつくるものが決まっておらず、ゴールも人それぞれ。技術を教える講師もいないので、部員さん同士が工夫し協力しあって制作に取り組む姿も見受けられます。それぞれの部員さんが雑がみの素材を上手に活かしながらつくっていたので、出来上がる作品への興味はいつも尽きることはありませんでした。

部員さんは随時募集しており、何をつくるのか悩んで1日が終わっても大丈夫。毎回参加する熱心な部員さんもいますし、ふらっと30分～1時間ほどの短い時間でつくりに来る部員さんや、お喋りに時間を費やし最後にひとつだけ作品を残した方も。

雑がみ部は私たちの想像を超える作品が次々と出来上がります。工作過程では「いいですね」という一言を掛けることがすごく大事だと実感しました。マネージャーになる方は、ものづくりの経験があったり日頃から関心がある、より雑がみ部の活動を楽しめるかもしれません。（マネージャー Aさん談）

闇の口

83

文：福田民造
画：阿部久米治

周吉には坑夫として全国を渡り歩いた豪快な叔父がいた。戦時中は鉄道敷設や防空壕掘り、戦後も高速道のトンネル工事などに腕をふるった彼は、時おり周吉の家を訪ねてきては波乱万丈の採掘譚を語って聞かせたが、何を思ったかある日マレーシアに行くと言って出たきり行方知れずになった。

幼い周吉にとって話の舞台は見知らぬ土地ばかり。のはずが、なぜか鮮明に風景が浮かび上がる話がひとつだけあった。右手に藤がからみついた拳形の岩。左手の沢を超えると凝灰岩の壁が現れる。叔父の言い回しだと「裏山全体が地下要塞さ。秘密の入口は神社の横。ちょこちょこっと入ったらドーンだ」。

話好きにありがちな虚言癖を差し引いたとしても、周吉にはその「ドーン」にただならぬリアリティがあった。かつて周吉自身が防空壕探検をして遊んだ経験が重なっているのかもしれないが、今こうして道なき山中を彷徨っているのも、その既視感の正体を探らずにはいられなくなったためである。

ヤブをかき分けて進む周吉の眼前に、それは不意に現れた。生い茂るクマザサの陰で音もなく深呼吸をする漆黒の「大きな口」。頬を打つ葉にばかり気を取られていた周吉は、距離感を見定めきれず思わず後ずさりした。

周囲の土は長年の風化で崩れ、手前に積もった土砂の間からは無数にきらめく白い粒と緑色の筋、虹色に反射する湧水。中からウォーンという音。空耳か、奥へと続く巨体の威圧感と暗闇の吸引力が周吉の土体を交互にゆさぶった。